
■冒頭挨拶/JCN代表世話人 栗田 暢之（くりた のぶゆき）

今日は様々難航している課題がある中で、とくに若者が多く集まって頂き、「人材不足」という課題を解消することをテーマに設定させて頂きました。

震災から4年目に入るにあたり日本全国がまさか復興にここまで時間がかかるとは思わなかったというのが正直なところだと思います。当事者が一番実感しているのではないかと思います。狭い仮設住宅でお暮らしになり、やっと災害公営住宅や高台移転など色々な話が聞こえてきます。

わたくしも色々な事業を実施する中で先日も岩手県の現場を訪問していましたが移動しながら風光明媚な三陸の風景を見ながらそれに似つかぬアパートの様なマンションの様な住宅が並び、それが復興住宅と聞いた時に今年には阪神大震災から20年という節目の年ですが、阪神ではビル（復興住宅）が沢山建ち、鉄の扉に閉ざされて孤独死が沢山出るという状況が再現されなければ良いなと考えています。

沿岸部の関係者の方とお話しますと、仮設住宅に住むおばあちゃんが「料理の仕方を忘れてしまった」というふうに言ってます。誰かのために食事をつくる楽しみそんなことが奪われてしまっている結果ではないかと思います。

復興が一步一步進んでいく陰で本当に当事者の方が望んだもとの暮らしに戻ることが本当にできているのかわたし達支援者はそうした現実を見ながら支援を継続していくことが求められていると思います。

その一方で、月並みですが、まちづくりには、よその、若者、馬鹿者の3つの要素がいるんだということが昔から言われています。通常わたしのスタッフのことは褒めないのですが、ぜひJCNレポートの中野の文章を読んでやって頂きたい。本当にものがき苦しんでいる現状が見事に描かれています。

彼のもんもんとした気持ち。頑張れば頑張るほど頑張っていた人が都会に出ていってしまう。戻ってきても仕事がないという課題を震災前から抱えている地域が震災後にどう復興していくのか。ここに住んでいるすべての人たちの大きな課題と言えば課題。そして日本社会全体の課題でもある。このままいけば地方が無くなると言われている中で、そうはさせるなということでこの4年という月日が復興はまだまだこれからなので今日お集まりの皆さま方を中心としてさらに良いふる里づくりをつづけていく、そのお手伝いをJCNもさせて頂きたいと考えております。

11回目となる現地会議も会を重ねるごとにフェーズごとの課題も変わってきており今回は地元の再生の課題の中で人不足、ノウハウ不足、資金不足などできれば色々な知恵を絞って頂き、課題の解決への糸口が1つでも見つければ良いと思います。

4年、5年、6年と復興もつづきますがハード工事は結果論が求められ先ににあるものがすべてのような感じがしますが人づくり、まちづくりはその過程が大切です。

尚、現地会議の開催に至っては、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議、いわて連復センター様の共催で実施させて頂きます。またメディアージの協力を得て全世界に情報発信をしていくこともJCNの役割と認識しており会議内容をライブ配信させて頂いています。いつもながら日本ファシリテーション協会様にも多大なご協力を頂いております。

本日はどうぞよろしくお願い致します。

趣旨説明

■JCN岩手駐在員 中野 圭（なかの けい）

JCNとは、東日本大震災ネットワークで全国の東北を応援する団体のネットワーク組織で、参加団体は現在637団体（3月2日）で一時は800団体以上であったが、4年目を迎えるにあたり再度、本当に活動している団

体などを
精査して絞った数字となっています。

活動は、被災地支援、広域避難者支援、後方支援に分かれており
現地会議は被災地支援の一環として行っております。
被災地支援は岩手、宮城、福島に駐在員を配置しており、わたしが岩手駐在員、東京に統括スタッフを一名配置し、計4名体制で実施しています。

ケース検討会議は、地域にある具体的な課題を1つのケースとしてとらえ
その解決策を検討することを通して他の地域の解決策を考えていくという趣旨で開催している。

JCNレポートは、まもなくVOL3が皆さんのお手元に届けられますが
被災地の現状、取り組みを広く情報発信をしています。

岩手での現地会議は11回を数えますが
その時々の岩手の課題を多くのNPO、社協、行政などと一緒に協議していく。
同時に全国、世界に向けてメディアージュさんの中継もあるように状況を発信しています。

今回のテーマは「人材不足に立ち向かう工夫とは」～担い手はこうしてうまれた～という
タイトルを付けました。

震災前から岩手には様々な社会課題があり、震災で顕在化し
多くの団体が立ち上がり活動をしてきています。
しかし時間が経つ中で緊急的な課題が終息してきている。

一方で、隠されていた昔からある課題が加速化し
前からある社会課題が膨らみ、その解決に挑まなければならないということで
岩手では現地会議を開催しています。

その中でも今回は人口減少、人口流出、少子化高齢化による深刻な人材不足に着目しました。

NPOの課題は、1位カネがない、2位ヒトがないという話を聞くのですが
「そもそも何がどのように人材不足なのか」という部分を具体的に突き詰めて考えなければ
いけないのではないかと
思っており今日はそれを是非皆さんと話し合い、なにがどの様に不足しているのか、なに
をすればその不足は解消できるのかという点を
考えていきたいと思っています。

まず1. 事例を知る 必要な人材とは?どのように解決していくか
1人目は隣の陸前高田のNPO法人SET三井さんから外部の支援と地元住民が交流を通
じて様々な変化をもたらし
その変化の結果として自分達の活動に参画していく人の事例をお聞きます。

2人目は宮城県気仙沼市唐桑からからくわ丸加藤さんから、自分たちの活動をいかに魅力的
に見せて、地元のひとに参加してもらう
といった話をして頂きます。

3人目は丹波市議会議員横田さんから地域の中で様々な人材がいるなかで
各自の役割を見極め分担していきながら当事者性を発揮してもらい活動を転換していくと
いうお話をさせていただきます。

事例を聞いた後に、ワークショップを実施して頂きますが
A. 自分の組織のことを考える
B. 岩手。地域のことを考える
に分かれて頂き、Bでは、2つの具体的なケースを準備してあるので皆さんと一緒に考え
ていきたい。

■NPO法人SET 三井 俊介 (みつい しゅんすけ)

1. 自己紹介

1998年生まれ。茨城つくば市出身で岩手とは元々縁もゆかりもなし。
法政大学国際開発協力を選考。途上国の貧困の村などを経済的に発展させていくかを学問
として勉強してきました。
大学ではサッカーx国際子協力をテーマに活動。
大学3年生になった時に3月に震災が発生し、3月13日に任意団体SETを設立し災害
ボランティアを開始。
2012年3月に大学を卒業し広田町に引っ越してきてNPO法人SETにして理事長に
なりました。
わたくしごとではありますが、昨年は妻をむかえ結婚もこちらの地でさせて頂き、子供も
できる予定です。
ふらっときて帰っていくというよりは、本当にこの地に住んで子どもを育てて暮らしてい
きたいと思っています。

2. 目指すこと

一人一人の「やりたい」を「できた」に変え、日本の未来に対して、「Good」な「Change」が起っている社会を創る！

団体メンバー全員で考えました。ぼくたちは陸前高田市広田町という僕らの大好きなまちで活動していますがその町を良くしていくことを通して日本の未来に対して良い活動をしていきたいと考えています。

大きいシステムをつくるという話ではなく、一人ひとりと向き合いながら一人一人のやりたい事や不安を取り除いて「できた」に変えていくことを目指しています。

上記の様な社会を創っていく時にどういった人がいるのか考えた時にこの下の

「Vision (そのためにSETは何をするのか？
自分らしく、社会を創る生き方、
働き方をする人を増やす。」
という、人づくりを軸に活動していくことを考えました。

3. 課題認識

広田町の持つ課題としては大きくは3つあり、半島なので交流する人が少ないこと、町内で8地区に分かれているので、地区内の交流が少なく新しい考え方が入ってこなく一次産業が衰退をしいてしまう。すると若い人は外に出ていってしまい、結果、地域のご年配の方が増えていき、家からなかなか出なくなり、交流する人が減っていく。こういった悪循環になっていると思います。この根本的な原因が何なのかと考えると、「町のために」活動する人が少ないのではと考えました。なぜ、町のために活動する人が増えていかないのかを地元の人などにも聴いてみると以下の様になります。

【住民の心理プロセス】
人は減ってるみたいだし、一次産業も衰退している。
→けど今の生活も何とかしてきたし続けてけばいいか
→このままじゃいけない地域のために活動しようと思う人が出たときも仲間がいなかったりする。
地震も高齢者(体力がない)
→あきらめてしまう。

ぼくらは外部から人を呼んで、外部の人を主体に置くのではなく、外部のひとはあくまでも応援者として刺激と応援を入れ続けることで街のために活動をする人を増やすことを考えています。
地元の一のあきらめを変えて希望を生んでいくことをしています。

4. 4年間の活動実績

- ・広田町は3500人の街です。

この4年で起業したケースが昨年2件。住民メンバーは2011年0人、いまは30人(人口の約1%)

- ・1ターンの人数は今我々2人ですが、この4月からあと2人来る予定。
- ・その他東京で常時活動しているメンバーが30名。
- ・4年間の来訪者が約1000人。
- ・住民のメンバーの活動としては、7つのチームに分かれ詳細についてはこれから説明します。

【町内で設立されたチーム】

- ・広田パソコン教室
- ・三陸館協議会
- ・和カフェ「tsuruya」チーム

- ・浜野菜チーム
- ・CMP広田町友会
- ・高田と僕らの未来開拓プロジェクト高校生チーム
- ・Obocco Bappaチーム

5. 活動内容

2011年4月に知人のついでで広田町と出会う。
この町で活動していこうと決意して大学に通いながら月に1回ボランティア活動をおこないました。
その時に、ガレキの撤去など1つの分野にしぼるのではなく広田町という「町」に活動対象を絞って、そこで聞いた課題などに対応していった。なので幅広く学習支援、スポーツ支援、農業漁業支援、ボラツアーなどの企画などを実施。
こういった活動を通じて感じた想いを東京で発信し、同年代の若者たちと共に広田にいこうという活動を最初はしました。

そこから色々と考えて大学を卒業したら引越そうと決意し、3月に卒業し、4月から引越してきました。

最初におこったのがボランティアの受け入れをしてくれた男性で、実務でパソコンを使っていたのでそのスキルを地元に戻したいという想いを聞かせて頂いたのと、同時に、地域のお母さん方からパソコンを実は習いたいという話があり、お2人を繋ぎパソコン教室を始めたのが一番最初の活動でした。週1回90分の教室を3つ開校しました。一番良かったと思ったのは、週1回90分必ずお母さんたちに会えるというのが大きかったなと思いました。そこでパソコンのスキルはお伝えするのですが、お母さんはお茶とかお菓子とかを持ってきてくれて、休憩時間に色々な話をしたりして仲良くなりました。そして、仲良くなったお母さんたちの中で野菜の販売をしているお母さんたちがいて、そのお母さんたちが実は販売をもっとしたいという悩みを聴かせて頂き僕らにできることを考えました。

野菜を販売するためのアイデアを東京からの社会人が来るので一緒に話し合おう、という場をつくりました。それが2012年10月でした。結果、東京から来た方々が、これだけ美味しい野菜であれば東京でも売れるので是非送ってくださいと言ってください、広田の野菜を発送するサービスを地元のお母さんたちに提案しました。これまで50年、60年、70年と地元の産直だけで野菜の販売をしてきたので外に販売することに対して怖い思いとか不安な思いがあることを聞きました。

ただ、2週間3週間と他の地域の成功事例などをする中で地元の生産者の方々もひと箱送ってみようかと言ってくれ、ひと箱送ってみたら「これくらいだったらできるかもしれない」と思ってくれ、次はこうやってみようというポジティブな意見に変わっていききました。その後、準備を進めて手作り浜野菜事業「おすそわけ便」という野菜の発送サービスがはじまりました。

(写真を見ると分かるように)最初は遠巻きにみながら見ていたのですが2か月3か月と経つとすごい笑顔になって一緒に活動をするようになってくれました。

大きな気づきとしては、挑戦する場所をつくると地元のひとと一緒にやってくれるんだなと思いました。今までは何かをやるうとしてみ「あなたのお手伝いをします」という形だったところを、これを一緒に挑戦しようと言うとわたし達も一緒にそれをやりましょうという風にならなくなったのが大きな気づきでした。

そこから広田町に挑戦する場所をつくろうと思いついてチェンジメーカープログラムというものをつくりました。これは、外部の大学生が1週間広田町に滞在し、地元の方と一緒に町のためになることを具体的に実行します。それを最後報告するというものです。

具体的な流れとしては、大学生を対象として有志の大学生が自分で参加費を払って参加します。

1週間広田町に滞在するのですが、その間に広田町の魅力を体験できるようなプログラム、地元の方との対話する場を用意したり、実際に町を歩いて町民の方からお話を聞かせてもらう場、体験プログラムを通じて感じたことをまとめていく会議(報告会)を行います。

1週間のうちの6日目には、参加者が街のためになること町の人と一緒に実行します。

例えば、これまでは、広田の魅力を発信するCMづくり、空き家をつかったツアー、慈恩寺というお寺をつかったお祭りなど色々な企画がここから生まれています。そして最後に報告会を実行しています。

実際にチェンジメーカープログラムをやってみて

報告会で参加者がすごく泣きました。それは広田町のことを変えることを本気で考えた時に、自分自信が変わらなければならぬことに気づきましたということをお話してくれた参加者がいました。そこで、自分達はこういう弱いところがあるけど、でも広田のために何とか頑張りたいから私たちは変わったんです、という話を参加してくれた子が話してくれました。

そしたら地元の方が「おれは今まで町を変えたいと思っていたが、行政が悪いとか漁協が悪いとか誰かが何かの批判ばかりをしていた。でも大学生の姿をみてそれは違ったんだということに気づいた。そうじゃなくて町を変えるためにはまず自分自身が変わらないといけないんだ。そして人は変われるという強さを若者達からおれは学んだぞ。勇気もらったからおれもこれからお前らと活動をできることをやってみよう」と言ってくれました。

そこから半年後にこの方はまだ大学生を受け入れるチェンジメーカープログラムをやってくれたのですが、具体的に一緒にプログラムをつくってくれました。そこから半年に一回にチェンジメーカーを実施してきました。

第3期、第4期とやっていった時には、広田の人がスタッフとして役割を担ってくれました。

例えば、地元のおじいちゃんが画家をやっている人がいて、地域の方にそれを見せたいということで大学生が来るタイミングで一日美術館を実施しました。画家のおじいちゃんが三陸館という名前を付けて受け入れてくれました。

そしたら、これまであまり元気がなかったおじいちゃんが、大学生と触れ合う中でおじいちゃんが凄く元気になりました。そして、その後おじいちゃんは自分の作品を世の中に残したいという気持ちになり、画集をつくりはじめました。それを聞いた広田のスタッフの方も協力したいと立ち上がり町内発の美術館となる「三陸館」づくりを地元の方がはじめました。これは3月1日にオープンしたばかりで、毎週日曜日の午後の時間にやっております。

初日は約50の方が来館してくれました。

チャンジメーカープログラムに1週間参加してくれた大学生たちが東京の方でコミュニティ・活動をする場をつくっており、今では約50人が常時活動をしています。

その中で広田町の子ども達と一緒にこんな活動もうまれ、例えば夏におこなったバーベキューをしながら中学生と大学生が交流する場所をつくったりとか、高校生と大学生が町の小学生や幼稚園児にサンタさんの格好になりプレゼントを届ける企画を高校生と一緒にやっています。

また、あみものチームが住民の中から発足し、おばあちゃんがつくった作品を都内に発送していこうという様なグループがうまれたり、地元の方で被災した和菓子屋さんを復活させたいということで一緒にクラウドファンディングをしたり、お店のオープンを手伝ったりだとかしています。あとは、広田で民泊をはじめましょうというグループが生まれました。

5. まとめ 大切にしてきたこと

最後に自分自身が大切にしてきたことをまとめると
挑戦する場所と行動する場所を地域に作り出すことで具体的に町の人たちの行動が変わってきたと思います。

また、一人ひとりに寄り添っていくことが大事だと思います。
何を不安に思うか何をやりたいのかなど一人ひとりにあった形を見つながらおこなっていくことが大事だと思います。
あとは、来てくれた方は単なるお客さんではなく、仲間であり自分達のパートナーであるという認識にたって東京に行った時に集まる場所をつくり関わりやすい形をどんどんつくっていくことが大事だなと思います。
あとは、一番ぼくらが重要視しているのは、楽しくやること。まちづくりというと堅苦しい頭の良い人たちがやるものというイメージがありますが、誰でも簡単にできるものだし、やると楽しいものだというので、笑いあいながらこれまでもやってきたし、これからもやっていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

■からくわ丸 加藤 拓馬 (かとう たくま)

わたしは隣のとなりの気仙沼市からやってきました。
今は唐桑という場所に住んでいます。
出身は兵庫県の姫路です。震災後に気仙沼市唐桑町に移住しました。

実は、三井さんと色々な接点がありまして
同じ年で、ぼくも三井さんも震災後に三陸に引越してきて、
唐桑半島の隣が広田半島で隣の半島に引越してきて同じようなまちづくりの活動をしているという話を聞いていました。

それに加え、去年わたくしも結婚し奥さんを連れてきたんですが、三井さんという人も同じ様な時期に結婚し東京から奥さんを連れてきたらしいと。そして奥さんの年も1つ下で、それもぼくと同じらしいと驚き、そして奥さんの名前も一緒らしいと聞いたときにはさすがに気持ち悪くなり、1回会っておかなければと思いはじめて会ったのが昨年末でした。
1つ違うのはわたしはまだパパではないということです。こうやって一緒にの会で登壇し合えるのも何かのご縁だと思いはじめ今日は楽しみにしてきました。

からくわ丸は今15人ほどで活動をしているのですが、そのうち3人が外からの1ターンで、残りの十数名が地元の10代、20代、30代の人たちなんです。そしてそれぞれ自分の仕事を持って休みの日に活動しています。

唐桑町は、気仙沼市の半島で、旧唐桑町ということで

およそ7000人くらいの人口を有し、「からくわ御殿」というのが有名で
遠洋マグロ漁船でかなり儲け優秀な船頭さんを沢山排出した土地です。すごく豪壮な家が沢山並んでいたところでした。

わたしはFWCという団体に4月の5日に入りました。その後に長期滞在ということでずっと活動をしていました。
というのも11年3月に大学を卒業予定で11年3月30日に内定を頂いていたところの社長に謝って一番最初に入ったのが唐桑でした。

最初はこんなに長く居るつもりはなかったのですが、ある程度の滞在はしようと思いつつがれき撤去をやっていました。
そのうちにソフト面の支援に移行してきてフリーペーパーなどをつくって唐桑半島を盛り上げたいと思い活動を開始しました。
そして1年経った2012年4月にはもう住み着いては居たんですが、正式に住民票を移し気仙沼市民になりました。

まちづくりの手法として地元学という手法を導入してからくわ丸という団体を立ち上げて活動をはじめました。

最初は自分が代表をやっていたがいずれ地元の団体にしたいと思っていたので
2013年からは地元の人間である立花淳一（じゅんちゃん）さん29歳に代表を譲って
今は地元団体としてやっていこうということで活動をしています。

こういうプレハブ小屋がありまして毎晩夜な夜なたまり場のようにして集まっており今に至ります。
あと関連の学生団体が東京と広島にもあります。地元のメンバーも徐々に増えていっており（グラフ参照）、
2012年の一番最初に大学を休学をしぼくも含め5人からくわに住んでいたことがきっかけでそのメンバーが復学し帰ったので1ターンは減ったのですが今はぼくとあと一人岡山から来た人、あとは奈良県から来た人が市役所で仕事をしながらからくわ丸の活動をしています。この春からはプラス4人の移住者がくる予定で、3人が新卒で、1人が中卒で来るということで今は必ず空き家を探しているところです。

取り組んできた活動は、基本的に「あるもの探し」をすることが僕たちのメインの活動で（地元学）
地域にまずあるものを探そうという発送で、そのためにまずは町歩いたり、地域の郷土料理・家庭料理をつくったり、わかもの会議（からくわルーキーズサミット）をし「こうをやったら町が面白くなるんじゃないか」といったアイデア出しなどもしました。その中でからくわ御殿は町の資源として地域の若者と一緒にグッズをつくったり、最近では地域の子どもの中心とした企画も実施したり、地域の行事に参加したりしています。
以上がイントロでした。

まず「内部人材の発掘」についてですが、

「キッカケづくり」
総大将じゅんちゃんの場合はなぜからくわ丸に関わるようになったか。それは、「女子大生」がキーとなりました（笑）。
会社と家を往復するだけの道に女子大生が歩いていて地元20代の仲間と話題になった。その後、じゅんちゃんと同級生のパーベキューに休学生が遊びにきていて、そこに行ってみようという言って最初にプレハブに来たのが最初でした。

「きょうみ。」
そこから淳ちゃんが何をこいつらやっているのか、という興味が出てきたと言っていました。
地元の神社でお祭りがありブースを出していたんですがその時に淳ちゃんも何かやってみたいということで手伝ってくれることになった。
その後、からくわ丸の報告会を東京で開くことになり淳ちゃんに話をしてもらうことになった。100人くらいの前で淳ちゃんが話をして気持ちよかった！と感じた。その前は修学旅行と結婚式以外では東京には来たことがなかったそうです。かなり衝撃的な体験だったようで、こういった小さな成功体験（達成感）が生まれた。
返ってきたらプレハブに仲間がいた。これが彼の中でのキッカケだったそうです。

「からくわ丸の方程式」という名前を付けて持ってきてしまったのですが
”キッカケづくり＝（女子大生＋興味）×小さな成功体験＋仲間”
この流れが淳ちゃんがかわくわ丸に関わるようになったキッカケだったそうです。
他のメンバーも同じような体験をしております。

では、キッカケがあり巻き込みその後、一緒にまちづくりを地元若者がどうアクションに深めていったかを考えてみました。
ワカモノのアクションの深化（わかものがどうアクションを深めたか）
ぼくはどうしてもよそ者なのでヨソモノの役割を良く考えるのですが、自分達の役割は彼らの地元愛を見える化していくことなんではないかと考えました。
”ヨソモノの役割＝地元愛の可視化（みえるか）”

というのは、淳ちゃんを含め地元のメンバーはめっちゃくちゃ唐桑が好きなんです。
ぼくはそこまで姫路が好きではないなと思ったんですが、彼らは唐桑が好きで好きで。ただ、「好きだけど…」みたいなどころがあって、何かをしているわけではなかった。

唐桑の何が良いんだろうね？というところを見える化することがヨソモノの役割だと思っています。
それが一番最初に少し触れた地元学という手法で、熊本県水俣の吉本哲郎さんという方が

「まずは自分の地域・足元を調べてみる」「ないものねだりをやめ」あるもの探しを”
と仰っています。
その時に、「外から来た人の客観性をうまく活かせ」と言っています。
外から来たひとはひたすら町の人たちに驚きと疑問を投げかける（屋号って何ですか？など）
そういったことで地元の人たちが気づくキッカケになる。

立花淳一（じゅんちゃん）が言って嬉しかったことが、
今までも唐桑が好きだったけど、何で好きだったかが人には説明できなかったが
今は何となく唐桑の良い部分を人に説明できるようになったと。
中にいる人と外の人と一緒にすることでジモトという得たいの知れないものを見える化していくんだなと気づきました。
見える化するということは、地元の魅力と課題を出していくこと。

方程式②

ワカモノ x ヨソモノ = ジモトの可視化 = ジモトの (魅力 + 課題)

例えば、地元の課題は地元を知らない子ども達。震災以降、海離れがかなり進んでいます。地元の魅力が何かと言うと彼ら自身。小さい時に遊んでいた遊び方が地元の魅力で、単純に釣り大会をやってみましょうということになる。

最後は、わかものアクションを継続的に実行していくために一番何が必要かということ。僕は地域の若者、ヨソモノを含めて「自信」が必要だと考えました。その自信を得るためには、地元の魅力を発信し課題を解決することが要素としてあるのですが、それだけでは若者はアクションを起こさないとします。

ではそれは何かと言うと「少年ジャ○ブ」的なワクワクする場だと。
(一晩考えたんですがやはりあまりピンとこなかった(笑))

つまり、若干バカでどこか熱くて基本的に自分達が一番楽しい！
そういった場所をどういう風につくれるかというのがかなり重要なのではないかと思います。

方程式③

ワカモノの自信 = ジモトの (魅力発信 + 課題解決) x X = 週刊少年ジャ○ブ的なワクワクする場

いまは、様々な活動をやっています。例えば、地域の子も達が竹に触ることもなければのこぎりに触ることもないので、地域のタケを使って秘密基地をつくったり、2日目は竹1本で釣りをし地域の漁師のOBさんが手伝ってくれたり、ワークラリーなどを実施しています。

「まとめ」としては、地域の若者を巻き込むために必要なのは、まずはキッカケ① (女子大生が歩いていた時の様な) インパクト。
そして②ジモトの可視化 (町歩きなど)。最後に自分達も楽しくなる様なワクワクする③週刊少年ジャ○ブ的”場” (イベント) をつくること。

■丹波市 市議会議員 横田 親 (よこた いたる)

丹波市の市議会議員をつとめさせて頂いています。
僕は丹波に移住して4年半、2年3カ月くらいで選挙に出ました。
元タリクルートという会社にいまして辞めまして、地域の雇用をつくらないと日本の未来がないと思い移住をしました。
その後、雇用をつくるために農業に関わろうと思ったのですが入った農業生産者法人を社長と喧嘩して首になり、どうやって働こうかと考え2か月ほど計200人にヒアリングをし、結果的にはNPOの仕事をした後に独立して経営のアドバイザー、NPOのアドバイザーを経て、選挙の10日前に立候補して出てうかってしまいました。

2013年1月にシェアハウスが1軒できあがり1ターンのでかえってきた人に専用で貸すというシェアハウスを
とあるオーナーさんがつくってくれて、1年半で8軒にまで増え、マックス35人が移住してきたというプロセスがあります。
今も少しずつ増えてきています。

今日はUターン・地元の役割の話をしてできるだけしたいと思っている。
その中で1ターンの巻き込み方、Uターンの巻き込み方、地元の巻き込み方のまずは1ターンの話をしたいと思います。
まず1ターンの明確な役割は、「地元の再評価・再定義」だと思っています。地元の人とは元々そこにあつたものなので客観的には見れない。しかし、違うところから来た大人が言う「ここ素晴らしいですね」は信用がおける。外の人はどういう部分が素晴らしいかをはっきりと言え。そのことは地元の人に必ず刺さる。そのこと自体が来て頂く意味があるということを確認して意識してお誘いもしています。なので1ターン・Uターンの人たちにもそうですが、人をお願いをする時は基本的に「何で私なのか」ということを明確に言わなければいけないと思っています。「地元の人たちでは魅力を発掘しにくい。そのことをちゃんと見えるのはあなたなんですよ。なので来てください」と言います。例えば、「この溝凄いいね」とか、何ともない1本道を「見通しが良いですね」とか、若いお姉ちゃんがおじいちゃんの軽トラの横に乗って「凄いい景色ですね」と言っている顔はにやついているんです。それができるのは外の人だと思うんです。そのことを分かって欲しいからちょっと来てくれと。

一方で1ターンの人達は、都会に飽きている人が増えています。まず都会にあるほとんどの遊びがゴールが決まっている。マーケティングをしてこういう風にしてこういう風に喜んでもらう、よりはパソコンのゲームみたいになっている。ロールプレイングゲームをやるより自分の人生をロールプレイングゲームにした方が面白いのではと言うと、面白いと思うけどきっかけが…という話になる。
都会は替えがききすぎるので替えがきかない存在になることを理解してもらうためにまず来てもらって、困っている現場に若い人を連れていくと良いと思う。そうするとすごい色々なアイデアを出してくれる。そして凄いいアイデアを出して欲しいと伝えておく。何かかというとなんかそれが今まで聞いたことのない話にならざる。それは都会の普通の女の子・

男の子には言える言葉だが地元の人には言えない。なぜかと言うとその景色がずっとそこにあり、そこにずっと暮らしているから言えないんです。それを言ってくれたお蔭で「うれい」と感じるし、「言えて良かった」と思ってもらえる。そこに役割が見えてくる。だからそこに居たくなる。替えがきく場所よりも自分が居た方が良く思える場所で暮らしたいですね。

ということで、僕は都会で暮らすもんとしている人たちに明確に言っているのは、「そこで暮らしていて幸せでなければ来い」という話をしていきます。

それをきくと皆さんそういう人を見つけていると思うんです。でもこの町に来てやってもらえることがあるのかと言いますが、あると思うんです。その人の視点でその町を評価してもらっただけで充分その子は「わたし役にたった」と思えると思うんです。そういうことをIターンの人たちには言っています。

実際にそれをやってみたお蔭ですごくこの場所にいる意義が感じられたと言って満足に暮らしてくれているIターンの子たちがいます。その子たちが居てくれたお蔭で地元のことを好きになってくれる地元の人が増えていきます。

Uターンにも役割があって、Iターンの人たちが再定義してくれた幸せだったり、素敵などころが見つけてくれそれをPRしていく時に、地元のプライドや作法が分からなかったり足を引っ張られるケースが多い。そうならないためのノウハウを共有したいと思っています。

・地域の人口割合として、地元80%、Uターン16%、Iターン4%と定義してみても何となく肌感覚であってなくはないなという感じがあります。
・良く言われる「2:6:2の法則」というものがあり、2割が変える人、6が悩む人、2が反対する人。それを下記の表にあてはめると「変人:普通:保守的」と定義してみます。

・下記の表に数値として当てはめると以下の様になる。
・イノベーター理論というものがあり、携帯電話が普及する時の例として良く使われますが、流行の先端が自分達で流行をつくり出すイノベーターがいて、それを見て良いと感じるアーリーアダプターがいて、アーリーマジョリティはアーリーアダプターの動きをみたりメディアの影響で良いかもしれないと思いつてくる。ここまですら約50%。その後の人はこのままいくと乗り遅れている人だと思われるという理由でのってくるのがレイトマジョリティ、そして最後のラガードは最後まで抵抗したが全員が変わったところでしれっとノするって変わる人。

先ほどのIターン、Uターン、地元の表の数値とイノベーター理論のグラフを重ね合わせてみると、結構一致している。とくに類似しているの点は前のプロセスの話しか聞かないという点。よくあるのは「変人」が地元の「保守」層に怒られる。そこで大事なことはイノベーターがアーリーアダプター以外に影響を及ぼそうとすることを「あきらめる」ということ。そこで、Iターンの変人が影響を与えやすいのが、Iターンの「普通」の人とUターンの普通の人。しかし、Iターンの変人と地元の変人には少し隔たりがあるが、Uターンの変人とIターンの変人は結構仲が良かったりする。理由は、Uターンの人は地元では学力が高く大学に行っているケースがほとんどで地元の変人は賢いと尊敬される。なので、Uターンの変人が、Iターンの変人と地元の変人を取り持てあげるとずっと仲良くなることがある。また、Uターンの変人の話を地元の「普通」と繋げられるのは地元の「変人」。

都会の人は「誰が言うかより何を言うか」という発想だが、「何を言うかより誰が言うか」ということが結構あります。どちらもコミュニケーションとしては正しいという認識を持たないと難しい。

今日言いたいことの大事な点は、83.2%つまり8割以上がUターンの普通の人をいかに当事者として思ってもらえるかで地域が変わると思っています。大事なことは、Iターンの変人はIターンの普通の人、Uターンの変人に影響を与えることに注力、Uターンの変人がUターンの普通の人と地元の変人をいかに巻き込めるかが重要。とくにIターンと地元をつなぐUターンの人たちがキーとなる。

また、変化を起こせるのはヨソモノかもしれないけど、本当に動かせるのはUターン者、地元であることを意識してもらって動いてもらうことが重要。

以上のことを何かのプロジェクトを通して体感してもらおうと色々変わっていくと考えています。

ありがとうございました。

▼Iターン
4%
変人
0.8%
普通
2.4%保守
0.8%
▼Uターン
16%
変人
3.2%
普通
9.6%

保守
3. 2 %

▼地元
80 %
変人
16 %
普通
48 %
保守
16 %

▼バズセッション

▼アンケート

■挨拶 いわて連携復興センター 鹿野 順一（かの じゅんいち）

皆さま、本日はお疲れ様でございました。第11回ということですが、自分達の団体に役に立つワークが増えてきて良いなと思っています。今日ここにお集まりの方の中で元々地元の人間でずっと生まれてからそこに住んでいますよという人の比率がどのくらいなのかなと支援に来たらここに居ついてちゃってるんですよという人の比率がどのくらいなのかなと最初の事例を聞いて思っていました。関わる人を増やしていく、どういう人材が求められているかという風な話をテーマと言った時にここに集められている人が求められている人材でしょ、こういう人材たちを増やしていけば良いだよねと実は思っていました。なので、求められていた人材から他の人を求める側に立ったという状態が、僕たちは仲間が増えたという感覚で、見えていて頼もしく思っています。今日はワークの中に入ってものすごく楽しいお話を一杯させて頂いたので、自分のところにも持って帰って棚卸をしてみたいなと考えました。6月以降に現地会議を開催致しますがまた、昔はヨソモノだったけどいまじゃここ地元の人間になっちゃましたという人がもっともって増えていることを願って感謝のご挨拶にしたいと思います。また次回もよろしくお願い致します。本日はありがとうございました。